

IKEメンだより ーいきいき かがやき 笑顔あふれる メンバーからー  
Vol. 2

大垣市がいきいきとかがやくためには、まず私たち職員一人ひとりが大垣市に愛着を持ち、元気にしていくことが大切です。本コラムでは、さまざまな分野で活躍される職員のみなさん一人ひとりにスポットを当て、プロフィールや熱いメッセージなどをお届けしていきます。

また本コラムは、人から人へバトンのようにつなげていきたいと思えます。今回はこの方をご紹介します。

お名前：<sup>おいだ</sup> <sup>まさかつ</sup> 種田 昌克 さん

所属：生活環境部 生活安全課（内線429）

担当する仕事：防災備蓄倉庫(市内26か所)資機材の点検及び整備、上石津地域ハザードマップ作成、防災出前講座、防災ひとづくり塾の企画・運営など



みなさんへPR・メッセージをどうぞ！！

「私なりの現場主義～「防災」によるひとづくり・地域コミュニティづくり～」

私たち職員は、住民の誰に対しても“公平”に日常業務を行っています。担当者によって対応が違っていると信用を得ることはできませんから、法令はもちろん先例やマニュアルに基づいて行っています。“日常”では合格です。

しかし、“非日常(災害時)”においては、日常の対応では不全に陥ることがままあります。例えば、避難所に120人がいて非常食が100食しかない場合にどのように配布したら良いでしょうか。災害ボランティアにはとても簡単なことですが、職員の立場では難しい問題です。災害ボランティアとして被災地に行き、一人や二人で必死に百数十人の避難者の対応をしている職員さんの姿を見るたびに「果たして行政だけで災害対応が可能か」と

いう疑問が湧きます。

いろんなご意見があるでしょうが、私は可能ではないと思っています。実際、阪神淡路大震災で生き埋めになった人で助けられた人の約8割は行政ではなく、隣近所の人によって助けられています。毎朝、近所の人と「おはよう」とあいさつすること(“さわやかみまもりeye”ボランティアの人たちのように)、これが一番の防災だと考えます。

であるなら、防災を使って地域コミュニティを活性化することはできないでしょうか。自然を壊すのも町を作るのも人です。良い町にするためには、良い野菜を育てる前に土から育てるがごとく、人から育てるべきだと思います(それで、昨年度から「防災ひとづくり塾」で防災ボランティアの育成を始めた)。

「無縁社会」「高齢化社会」が問題になっている一方で、人と深くかかわりたくない、子供の元気な笑い声がうるさいと感じる人がいる世の中です。こういう現代社会でいかに地域コミュニティを活性化させたらよいか、行き詰まり感すら覚えます。

しかし、答えは「現場」にあると思います。私は、もっと町に出て住民の方々といろんな話をしたいと思っています。ただし、現場に行っても事務所に帰ってきてから答えを見つけるのでは本当の現場主義とは言えません。私たちは役人なのでいくら考えても役人の答えしか出せません。考えてそれでもやっぱり「おかしい」と思うのであれば、やはり現場に行き現場で考えることが必要であると思っています。

考えるには知識の蓄積が必要です。寺山修司は「書を捨てよ町に出よう」と言いましたが、「書を捨てる」のもいいですが、その前に「書を読む」必要があります。「町へ出る」のもいいですが、出たあとでも「書を読み続ける」必要があります。そんなこんなで、「私なりの現場主義」で防災による地域コミュニティづくりを推進していこうと思っています。

種田さんは、文中の防災ひとづくり塾や消防団活動をはじめ、市の防災の先駆けとして地域に目を向けた活動に力を入れてみえます。その姿は同じ職員として実に誇りに思います。もっとお話を聞きたい方は、ぜひ声をかけてみてください。